

スポーツ通訳者に求められる役割

—プロ野球球団通訳者に対する M-GTA を援用した分析を通じて—

板谷 初子

(北海道武蔵女子短期大学)

This paper aims to identify the roles that interpreters play in the arena of professional baseball, and hence to explore the expectations held of sports interpreters in general. This study reveals that more importance is attached to interpersonal or social roles than cognitive or linguistic roles in baseball interpreting. It also demonstrates that many baseball interpreters, after performing an invisible role to support players, desire to play a visible role by assuming different posts inside or outside the baseball world. One of the implications stemming from this research for sports interpreting is that interpreters should be prepared to shift their “footing” from being an “animator” to an “author” or at times to a “principal” in order to create an optimal environment for the players. In addition, sports interpreters need to adopt various interpreting strategies according to different situations, such as at post-game victory interviews and/or press conferences.

1. はじめに

スポーツ通訳の中で、その歴史が最も長く、また最も日本国民に馴染みがあるのはプロ野球の通訳であろう。日本のプロ野球界で外国人選手が初めて誕生したのは1934年であり（中島 2015）、野球通訳の歴史は半世紀以上に及ぶ（牛込 1993）。しかしプロ野球球団通訳者を対象にした研究事例は少ない。また、野球に限らずスポーツ通訳が研究対象になることはきわめて稀である。日本通訳翻訳学会の学会誌『通訳研究』の創刊号（2000年）から第7号（2007年）までと、その後名称が『通訳翻訳研究』と変更された第8号（2008年）から第16号（2016年）までに掲載された全投稿312件中、スポーツ通訳をテーマにしたものはない。

日本の通訳学研究者がスポーツ通訳をとりあげてこなかったのには、2つの理由が考えられる。第一に、これまでスポーツ通訳は、一通訳領域として広く認知されてこなかったことが挙げられる。代表的な通訳（学）入門書（北林ほか 1998；石黒 2007；友

ITAYA Hatsuko, “The Roles Expected of Sports Interpreters: From a Study Employing M-GTA on Professional Baseball Interpreters,” *Interpreting and Translation Studies*, No.17, 2017. Pages 23-43. © by the Japan Association for Interpreting and Translation Studies

野ほか 2012; 鳥飼 2013)においてスポーツ通訳への言及がなされていない事実からも、このことが推測される。二つ目の理由は、研究者によるフィールドへの参入が困難であるということだ。選手のコンディションへの影響を考慮して、フィールドから研究協力の承諾が得にくいことが予想される。これらの理由により、スポーツ通訳研究は積極的に行われてこなかったと考えられる。

今後日本では、2020年の東京オリンピック・パラリンピックに代表される数多くの国際スポーツイベントの開催が予定されている。このようなイベントでは、一度に多くの通訳者が必要となるため、スポーツ通訳未経験者や、通訳訓練を受けていないバイリンガル話者による lay interpreting (素人通訳) (Pöchhacker, 2004, p.22) が行われる可能性が高い。また 2015年に設立されたスポーツ庁が、スポーツを通じた国際交流の促進をその目標の一つに掲げていることから (文部科学省 2016)、スポーツ通訳者が必要とされる場が増加することが期待される。そのため、スポーツ通訳者の内側の論理やローカルな知にアクセスし、スポーツ通訳というフィールドで蓄積された暗黙知を明らかにすることは、通訳学における既存研究の間隙を埋め、通訳実務に貢献すると考える。そこで本研究では、国民的娯楽として多くの日本人が長く親しんできたプロ野球の球団通訳者に焦点を当て、その役割の諸相を明らかにすることで、スポーツ通訳に対する知見を得ることを目的とする。

2. 先行研究

2.1 社会学における役割の定義

本稿では、「通訳は相互行為である」と指摘した Wadensjö (1998) が分析の枠組みとして採用した、ゴッフマン (1978) の役割概念を基本的枠組みとして分析を進める。ゴッフマン (ibid.) は役割を、「在職者が、彼の位置にある者に課せられる規範的な要請との関係だけで行為しなければならないとした場合に、携わるであろう活動からなるものである」(p.85) と定義した。また矛盾した役割に直面する際には「役割葛藤」が、個人と役割が乖離する場合には「役割距離」が生ずると指摘した (ibid.)。

佐藤 (1976) は個人行為者の視点から役割を考察し、役割行為のもたらす「欲求充足」が、役割にコミットする根本的な動機づけだと主張した。本稿では「役割葛藤」「役割距離」「欲求充足」などの観点から球団通訳者が果たす役割を考察する。

2.2 通訳者の役割論

グローバル化に伴い、コミュニティ通訳の必要性が高まるにつれて、通訳者の役割論研究が近年活発化している (水野 2008)。通訳者は、法廷通訳人が一語一句忠実に訳す存在であるという主張から、「忠実なこだま」「チャンネル」「導管」「転換装置」「伝達ベルト」「モデム」「出入力ロボット」などのメタファーで表現されてきた (ポエヒハッカー 2008, p.178)。日本においても同様の通訳観は存在し (水野 2008; 米原 1998)、通訳者は「透明人間」(西山 1970)、「黒衣」などに例えられた。長井 (2014) は、政治

家の失言のような発言であろうとも、通訳者が原発言を編集することは許されないと主張した。

その一方で Angelelli (2004) は、実際には多くの通訳者が自身の役割を「可視的」と見なしていることを明らかにし、通訳研究においては「言語的側面」(例：訳出方略)ばかりでなく、「社会的側面」(例：役割)にも焦点をあてるべきだと主張した。溝口 (2009) はこの二つの機能を「訳し方」と「関わり方」と表現した。日本における5人の同時通訳のパイオニア(西山千、相馬雪香、村松増美、國弘政雄、小松達也)たちの中にも、可視的役割を肯定する発言が確認されている。國広は「ロボットでもなければ、機械でもありません」(鳥飼 2007, p.236)と述べ、小松は「見えるけれど性能の良い機械」(ibid., p.326)と語り、通訳者の個性が訳出に反映されることを示した。

通訳者自身の役割認知は、自己アイデンティティ、年齢、社会経済的地位のような個人の社会的要因よりも、通訳業務を行う状況に依存する (Angelelli, 2004)。本稿では、プロ野球という状況における通訳者の役割を探る。

2.3 プロ野球球団通訳者の役割研究

プロ野球球団通訳の先行研究は少ない。立原 (2015) は、2名の球団通訳者へのインタビュー調査と1名へのアンケート調査から、球団通訳者の役割は「外国人選手の能力を最大限引き出し日本で活躍させること」(p.68)であると結論づけている。また、言葉を訳す以外の役割(「社会的側面」)が役割の核である「訓練なし」(ポエヒハッカー 2008, p.20)の球団通訳者を、通訳者の範疇に置くことに疑問を呈し、球団通訳者再定義の必要性を主張した。

2.4 野球関係者によるプロ野球球団通訳者の役割記述

球団通訳者の役割に関して、通訳者本人や外国人選手などの視点からなされた記述がある。元球団通訳者の中島 (1994, p.25) は、『プロ野球通訳』の果たす役割は、二十数年前には日本の球団はおろか、外国人選手にも当の通訳本人にも理解されていなかった」と述べ、業務を通じて「選手をベストコンディションで臨ませることこそが通訳の仕事なのだ」(ibid., p.30)という結論に至っている²⁾。中島 (2015) は、そのために球団・マスコミとの間での「潤滑油」となり、また選手の家族のケアにも力を注いだと記している。またある外国人選手は球団通訳者を「ベビーシッター」「精神分析医」「仲間(コンパニオン)」と表現している(中島 1994)。

自らも選手として数々のタイトルを獲得し、その後三球団で監督を務めた野村克也元監督の見解によると、球団通訳者に求められる役割はただ訳すだけの「翻訳マシン」ではなく、野球に精通し選手のサポートをすることである (ibid.)。またそれに加えて、試合後は「心を打ち明けられる話し相手であり、ほかの人ときらくに接触させるコーディネーターでもあり彼らの孤独感を取り払うように配慮するカウンセラーでもある」とも語っている (ibid., p.216)。なお本稿では、以後「コーディネーター」という

言葉を、「外国人選手とほかの人のコミュニケーションを促す人」という意味で使用する。

ジャーナリストのホワイトティング(1987)は、球団と外国人選手との間で板挟みの球団通訳者を「サンドイッチマン」と紹介した³⁾。同書には6人の球団通訳者のインタビューが掲載されているが、6人中5人が「通訳の仕事は誰にもほめてもらえない」「割に合わない」「批判されるのが宿命」「僕の存在は無視される」「フロントは、通訳のことなんか眼中にない」「一生懸命勉強しても何の意味もない」「ごほうびも出ない」「理解してもらえない」「板挟み」「通訳の仕事は少ないと誤解されている」「小間使い」「使い走り」などという表現を用いて、通訳業務に対する周囲からの認知の欠如を指摘している。この6人は球団通訳界の先駆者的存在であり、彼らのうち3人が後にスカウト、球団幹部職員、球団代表など、野球界での要職に就いたことは興味深い。先駆者の一人である牛込(1993)は、球団通訳は「英語を話すマシンになってはいけない」(p.262)と主張し、「通訳は『痛役』だ」(p.263)と、その業務の過酷さを表現している。

3. 研究の目的

本研究の目的は、プロ野球球団通訳者の役割の諸相を明らかにすることを通して、スポーツという状況において通訳者に求められる役割を考察することである。また立原(2015)の研究で提案された球団通訳者の定義の再検討も、ここで行ってみたい。

4. 研究方法

4.1 調査対象者

本研究における調査対象は、「日本プロ野球機構(Nippon Professional Baseball Organization)」(以下NPB)と「アメリカメジャーリーグ(Major League Baseball)」(以下MLB)の現役通訳者7名、元通訳者5名、NPBの外国人選手3名とその家族1名、NPBの球団職員1名、テレビ局スポーツ記者1名である。ただし、球団職員とテレビ局スポーツ記者は、元球団通訳者としてもインタビューを行っているため、調査対象者の実数は合計16名である。NPBとMLBの両方に所属する通訳者を調査対象とした理由は、MLB経験者6人全員がNPBでも通訳経験があることから、双方での経験を区別することができなかったためである。なお調査の結果、NPBとMLBで彼らの役割や通訳観に大きな差は認められなかった。調査対象者の通訳経験年数は最長で25年、最短で1年である。言語は英語、スペイン語、韓国語の3カ国語で、2人を除き英語である。現役通訳者7人の年齢層は、20代が3人、30代が2人、40代が2人で、50代以上はいない。NPBの一軍現役通訳者は総数が24人と少なく、人物が特定されやすいため、プライバシー保護の観点から、個々の調査対象者の詳細な背景記述は割愛する。

4.2 調査方法

4.2.1 インテンシブ・インタビュー

16人の調査対象者に対し、2015年12月から2016年11月の期間にインテンシブ・インタビュー（Charmaz, 2006）を行った。自由な語りの中から「研究参加者が各々持つ自身の経験に対する解釈を引き出す」（シャマーズ 2008, p.32）ことを目指して、質問項目は最小限にとどめた。1人あたりのインタビュー時間は、最短で17分から最長で4時間に及び、合計時間は26時間37分となった。インタビュー時間の平均は、通訳者の場合2時間2分、外国人選手の場合は28分であった。インタビュー内容は調査対象者の許可を得てICレコーダーにて録音し、文字起こしを行った⁴⁾。

4.2.2 参与観察

NPB4球団から許可を得て、公式戦直前の約2時間の練習時間帯に、ベンチ前で11回の参与観察を実施し、フィールドノートを作成した。また一球団から許可を得て、ぶら下がり取材の通訳場面を3回、また、テレビ番組制作中の通訳場面を1回ビデオ撮影した⁵⁾。

4.2.3 通訳音声テキスト分析

2012年から2016年シーズンの、パ・リーグ全球団の公式戦におけるすべてのヒーロー・インタビューを視聴し、原発言が文字通り訳されていないヒーロー・インタビューの書き起こしを行った。また、参与観察で録画した通訳音声画像もテキスト分析の対象とした。

5. 分析方法

5.1 修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（M-GTA）

グラウンデッド・セオリー・アプローチ（Grounded Theory Approach, 以下GTA）とは、人間と人間が直接的にやりとりをする社会的相互作用に関わる研究において、データに密着しながら（grounded on data）分析を行い、理論を生成する質的研究法である（木下 1999, 2003, 2007; Charmaz, 2006）。GTAは質的研究法の中で最も手続きが体系化されていることに加え、研究対象の実状を反映したデータに基づき理論化を行えることから、質的研究において近年広く採用されている（山本 2014）。本研究では、6種類に分化したGTA（ibid.）の中で、木下が提唱する修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（Modified Grounded Theory Approach, 以下M-GTA）を援用し、分析を行った。M-GTAを援用した理由は、データの切片化を行わない分析法にある。特定語句や表現だけをキーワード的に拾い出していく代わりに、データの背後にある意味の流れを読み取り、コンテキストを解釈しながらデータを意識化・言語化するM-GTAが、本研究の「自由な語り」と「豊富なデータ」の解釈には適切だと判断したからである。

5.2 分析ワークシート

M-GTA では、データから「概念」を生成するために、分析ワークシートを作成する。作成の手順は次の通りである。まず研究者がテキストを丁寧に読み込み、そこから見いだされた共通する要素をワークシートのヴァリエーション欄に記入する。複数のヴァリエーションが得られた場合には、「概念」名とその「定義」を決定し、共通要素を持つ概念を「カテゴリー」としてまとめる。ワークシートの理論的メモ欄には、解釈の思考プロセスや、他の解釈案、疑問、アイデア、対極例などを記入することで、解釈が恣意的になることを防ぐ。本研究では最終的に26の概念と7のカテゴリーが生成され、ワークシートは104ページ、117,936語に及んだ。M-GTAでは、ワークシートそのものではなくワークシートに基づき構築されたプロセスモデルを提示して調査結果を詳述していくが、分析過程を可視化するためワークシートの一部（概念25）を具体例として表1に示す。この分析ワークシートでは**黒衣と役者**という概念が〈役割距離〉というカテゴリーに分類されている⁶⁾。No.1、No.2などの数字はインタビュー対象者を表す。なお、No.2は元球団通訳者であるが、後に通訳者を採用、指導する立場になったことから、後者の立場で話している時には、No.2' と記した。下線は筆者による強調であり、() は筆者による補足、…は省略箇所を表す⁷⁾。

表1 分析ワークシート例

概念 25	〈役割距離〉：黒衣と役者
定義	球団通訳者の多くは、黒衣である自分と、なりたい自分との間に役割距離を感じており、いずれは自分の意見が仕事に反映されるような仕事をしたい（役者になりたい）と考えている。
ヴァリエーション	
No.1 「やっぱり自分には野心みたいなものもあるわけですよ。『いずれ俺はこの会社の役員とか、 <u>いずれは上に行ってやる</u> 』っていう野心。」	
No.2 「…プロの通訳者の方はいろいろなシチュエーションに出くわすと思いますけれども、野球界という狭い中で通訳をしていて、それが毎年毎年積み重なっていくと、 <u>自分がないような気持ちになっていくんですね。ここでミーティングをしていても、皆が同じ共通言語を話すことができれば、僕はいらないわけですね。そこで自分が自分の意見を述べるわけでもない…この組織を知れば知るほど、自分の意見も出てくるわけですね…そういった、ものを言えないもどかしさを、最後のほうは抱えていたという部分はあったかもしれないですね。やはり自分の存在意義みたいなものを、自分の中で勝手に悩んでしまう部分…自分で賽を振りたいという気になってきてしまうかもしれないですね。</u> 」	

No.2' 『自分はという役割、という位置づけなんだろう』ということがどんどん膨らんできて…（辞める）サイクルは結構早いんですね。どの球団でもそうだと思いますね…漠然といやだから辞めるというよりは、むしろこういうことがしてみたいという者が圧倒的に多いです。』

No.3 「通訳というポジションは、軽視するわけではないんですけど、何か違った責任あるポジションというか、そういったことはやっていきたいです。」

No.4 「そうですね、（通訳の仕事には）限界があると思うんですよ…。」

No.5 「今の立場は通訳なので、立場上できることとできないことを区別しています。でも通訳の立場以上のことをやりたいんだったら、人から認められて上に行くしかないと思うので…通訳としてではなくて、本当はスカウトをやりたいと思ってて。自分が決断できるか、そこまで行かなくても、少なくとも自分の意見がそういう決断に反映されるか、そういう決断に関わる過程を知っている人間になりたいと思います。通訳やってもそこは得られない。」

No.6 「（将来は）できることならこの世界（野球界）に居続けていて、ちょっと大事な、少し大事なポジションにつけていたらいいなあ、とと思いますね。」

No.7 「通訳はやっぱり受け身なことが多いので、自分の意見を言っちゃいけないという前提はあるので、そういった意味で、通訳のやり甲斐を見失ったという人は知っています。もっと自分で生産性のある仕事をしたいと言って、別の部署に変わった方は知っています。」

No.8 「…自分がずっといることがいいことなのかどうかは、正直わからなかったですね。」

No.9 『誰々の通訳をやっていたんだよ』というと、やっぱりそれが先に来ちゃうんです。だからそれを上回る何かをやりたいですね。」

No.11 「人生で今の仕事以外にやりたいことはあるんですけど…。」

No.12 「（将来は）野球には関わっていたいですね…まあ、通訳じゃないことは願います。」

理論的メモ

自分の意見が反映される仕事につきたいと考えている球団通訳者が多い。これは日本における同時通訳のパイオニアたちが「通訳がいやになった」「自分の歌を唄いたい」(鳥飼 2007) と語っていたことに通ずる。No.1, 2, 7, 8, 9 はインタビュー時には既に転職している。No.10 からは役割距離を感じているという主旨の発言はなく、この時点で球団通訳を続けてもいいと答えたのは No.10 一人であった。

6. 分析結果と考察

M-GTA では、「カテゴリー」間の関係性、相互作用などのプロセスを動的に示したモデルを作成する (図 1)。次に、モデルの概要を簡潔に文章化し、さらに個々のカテゴリーごとの説明を行う。〈 〉はカテゴリー、**太字**は概念を示す。「役割の外的変化」は、通訳者の入団から退団までの目に見える動きであり、「役割の内的変化」は通訳者の心理状態の変化を示す。

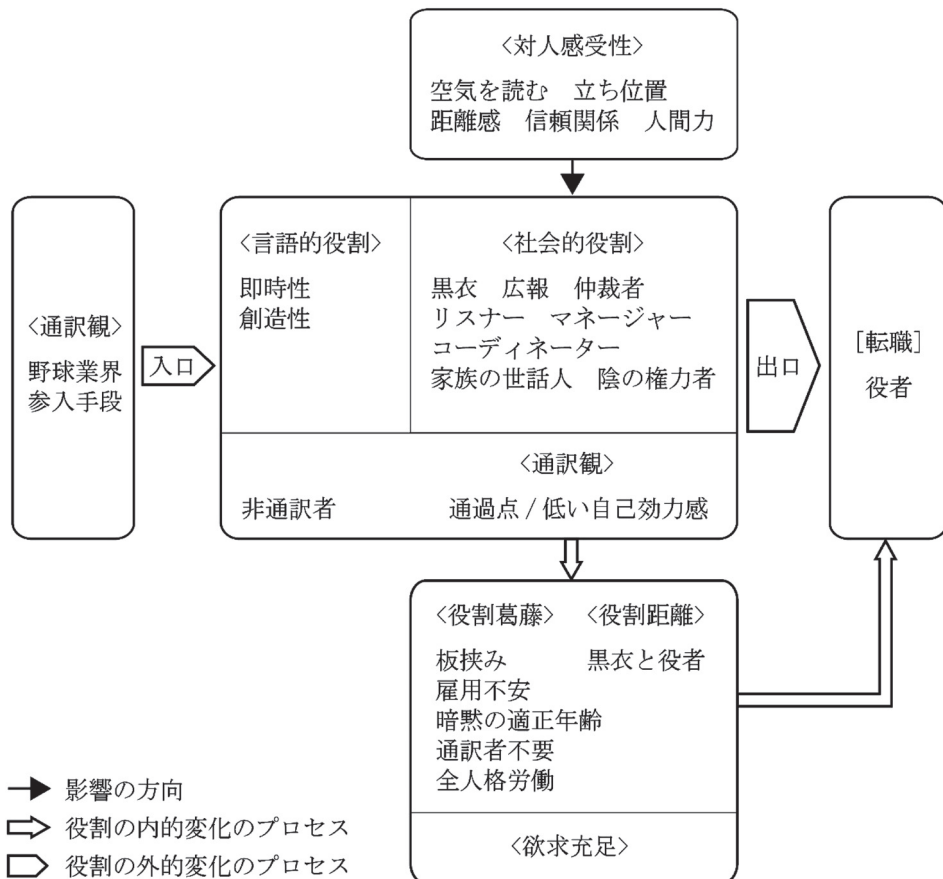


図 1 球団通訳者の役割変化のプロセス

6.1 球団通訳者の役割に関わる全体のプロセス

球団通訳者誕生の典型的なプロセスは次の通りだ。①野球またはスポーツに深く関わってきたこと ②外国語を話せること ③野球業界に人脈があること、の3つの条件が重なると、人づてに声がかかり、球団通訳者になる。①に関しては、プロ野球選手やトレーナーなどを目指してアメリカへ留学をしていた例が多く、語学留学生者は皆無だった。業界参入時の〈通訳観〉は**野球業界参入手段**である。**非通訳者**というアイデンティティを持ちながら通訳業務を行い、**自己効力感**は低く、通訳という仕事を最終目標への**通過点**ととらえている。役割期待としては〈言語的役割〉よりも〈社会的役割〉の要素が圧倒的に大きい。業務を続ける中で役割過多が原因で〈役割葛藤〉が生じている。また、役割を遂行する社会的自我（黒衣）と、理想の自我（役者）との間の〈役割距離〉が拡大し、その結果、〈欲求充足〉はあるものの、転職という形で役割変更（黒衣から役者への転身）が行われた事例が数多く確認されている。

6.2 カテゴリーごとの説明

6.2.1 通訳観

12名の球団通訳者中、通訳者を目指していた者は皆無であった。「ただ野球が大好きでした」「プロ野球選手を目指していました」「野球人というのが大前提」など、11名は野球またはスポーツに深く関わってきた。ある通訳者は通訳という仕事を野球界に入る「踏み台」と表現し、この職業を**野球業界参入手段**および最終目標への**通過点**と捉えている。この点は、MLB通訳者松本重誠氏の「多くの通訳を知っています。彼らは別の何かになりたいんです。ステップアップして、日本でスカウトやGMを目指しているんだと思います」（Full-Count編集部, 2017, パラ7）という発言からも裏付けられる。

球団通訳者は表向きには公募されていても、人脈を通じて指名されることが多い。「推薦して頂いた」「たまたま人づてで」「声がかかった」など、通訳を目指していたのではないという趣旨の回答が多い。本研究の調査対象者12名中、11名が公募によらない入団であった。

通訳スキルに関しては、通訳訓練を受けた例は皆無であった。彼らは「訓練なし」の通訳者（ポエヒハッカー 2008, p.20）であり、彼らの〈通訳観〉は**非通訳者**である。「専門に勉強された方々からすると、本当に我々のやっている事は恥ずかしくて」「野球通訳は、通訳と思って仕事をしている人はいないと思うんです、会議通訳の方たちを同業者だとは思っていないです、全く違う仕事で、全く違うルールだと思います」などの発言から、彼らのアイデンティティは通訳者ではないことが推測される。

球団通訳者の**自己効力感**は高いとは言い難い。「自分の代わりはいくらでもいる」「僕が通訳をして誰かの心が動くということは無い」「どんだけ一生懸命やっても、それが選手の活躍の要因になるというのはありえない」などの発言がそれを裏付けている。これはパイオニアの一人である小松の「通訳の役割はそれほど大きくない」（鳥飼 2007,

p.273) という発言に類似する。

しかしその一方で、1973年から25年間活躍した元球団通訳者は、外国人選手の活躍は通訳者にかかっていると本調査のインタビューで話している。1978年から10年間日本でプレーをしたレオン・リーという選手も「通訳と良い関係を築くことが、日本で成功する鍵を八割方握っている」(中島 1994, p.104) と、通訳者の影響力を評価している。このような見解の相違には、個人的見解の相違のほかに時代背景の違いも関係していると推測される。以前はベースボールと野球の違いがあまり理解されておらず、外国人選手の日本野球への反発は大きく (ホーナー 1988)、球団通訳者は野球文化の差を埋めることに多くのエネルギーを費やしていた (中島 1994/2015)。しかし現在では日本野球についての知識がメジャーリーグにも浸透し、かつ、球団は外国人選手獲得の際に、日本野球に適応できる性格の選手を選んでいる (中島 2015)。筆者がインタビューをした3人の外国人選手たちも、日本からのオファーを喜んで受け入れたと語っている。したがって、野球文化の差を埋める通訳者の役割は縮小傾向にあり (立原 2015)、そのことが昭和と平成の〈通訳観〉の相違につながっていると考えられる。

6.2.2 言語的役割

プロ野球通訳では、勝負及びエンターテイメントという二つの条件を満たすために、訳出には**即時性**と**創造性**が要求される。**即時性**は通訳の本質であるが、スポーツ通訳ではとりわけその重要性が高い。インタビューをした12名の現役および元通訳者のうち、9名が訳出の際の**即時性**に言及し、うち3名は「スピード感」という言葉を用いてその重要性を説明している。発言例として「遠回しになったらもう終わりなんですよ...全部訳してたら選手もいらいらする、なんせ投げて打つ世界だからスピード感が必要なのよ」「アスリート系の人で、人の話を通訳が訳すのを待つて聞くことができる人はそういない」「会議通訳とかとはまたちょっと違って、ほんともう限られた時間の中で、みんなが焦ってる」「戦場なんで」などが挙げられる。球団通訳者はスピード感を維持するために「情報を絞って訳す」「手で指し示して言葉をあまり使わない」などの方略を用いている。また通訳ユーザーとしてのスポーツ選手が簡潔な訳を好む傾向にあることは、上記の球団通訳者たちの発言からばかりでなく、筆者による外国人選手へのインタビューからも確認された。この選手は、二人の球団通訳者を比較し、ヒーロー・インタビューではぎこちない「間」を作らず簡潔に訳す方の通訳者を好むと話している。このような**即時性**は前述の通り、要点だけを訳すことで実現されるほか、**創造的**訳出により可能になることが、本調査で明らかになった。ヒーロー・インタビューにおける**創造的**訳出例を次に示す。通訳時間は、筆者がストップウォッチで10回測定をした平均値である。

【2015年シーズン ヒーロー・インタビュー】

インタビューアー：同点タイムリーツーベースヒットを放ちましたが、センターオー

バーの大きな当たり、打球伸びましたねー。

(中略)

インタビュアー：ただ、そのタイムリーツーベースヒットを放った後、打った瞬間、すぐには走り出しませんでしたよね？(発声時間 6.31 秒)

通訳者 A：(音声は不明。0.77 秒で訳しているのを口の動きから測定。)

外国人選手：Sorry, uh...sorry.

(中略)

インタビュアー：今日の〇〇(球団名)を勝利へ導く同点タイムリーツーベースヒット、お寿司のネタにたとえるなら何でしょうか？(発声時間 6.08 秒)

通訳者 A：(音声は不明。0.87 秒で訳しているのを口の動きから測定。)

外国人選手：Tuna and salmon. *Sushi daisuki.*

通訳者 A：マグロとサーモン。寿司大好き。

インタビュアー：今日は二つの大きなネタが飛び出した△△選手。明日への意気込みを聞かせてください。

外国人選手：*Mada mada akiramenai.*

A 氏は、最初の 2 回の通訳で、共に 6 秒以上の原発言を 1 秒以下で訳出した。最初の訳出では、専門用語知識を利用して、**即時性**を確保している。A 氏によると、「ホームランを打って、かっこつけてすぐに走り出さない行為」を *pimp* と言うそうだ。そのため “You pimped it. Why?” と訳出したそうである。次の訳出では、“What's your favorite sushi?” と訳したそうだ。A 氏は、このような奇抜な質問をそのまま訳すと、選手が混乱して的外れの答えが返ってくるという自身の経験から、瞬時にこのような**創造的**訳出をしたそうである。A 氏によると、試合直後の選手はまだ気分が高揚しており、多くの情報を伝えてもそれが正確に伝わらないことがあるという。また別の球団通訳者は「プロのアスリートは、試合直後はアドレナリンがまだ出続けていて『目がいっちゃってる』ので、シンプルに訳す」と話している。そのため、A 氏はあえて**創造的**訳出による簡潔な訳を心がけ、適切な回答を引き出すよう留意することがあるそうだ。また、上記の訳出例で、外国人選手は最後に日本語で話している。この点について A 氏は、できるだけ選手に日本語を教えて、選手が直接ファンに語りかけられるようにしていると説明した。これもまた、**即時性**を確保するための手段の一つであると言える。

このような**創造的**訳出方略を是とするか非とするかは、賛否両論に分かれるところである。通訳の原則は「忠実性」と「正確性」であることは議論の余地がない。しかし状況に応じて選択的、**創造的**訳出ができることこそが通訳者の付加価値である(木村 2017)という側面も否定できない。プロスポーツは、スポーツエンターテイメントでもあり、観客がいなければ成り立たない(河島 2013)。A 氏が「ヒーロー・インタ

ビューはファンの方に楽しんで頂くときなので、なるべくおもしろおかしく訳しています」と語っているように、通訳翻訳の目標（スコpos）に焦点を当てる機能主義的アプローチの観点からすると、ヒーロー・インタビューにおける通訳行為は単なる言語変換ではなく、選手とファンを「つなぐ」行為である。訳出の際にはコミュニケーションの目的を意識する必要がある、唯一無二の正しい訳出法は存在せず、目的によって訳出方法は変わることがあり得る（木村 2017; 武田 2013）。この場面で A 氏は、スコpos理論に基づいた訳出方略を選択していたと言える。

ヒーロー・インタビューにおける訳出時間に注目することからも球団通訳者がスコposに応じた訳し分けをしていることがわかる。2016年シーズンのパ・リーグ全球団で、複数回通訳をした通訳者 11 名による合計 70 回のヒーロー・インタビューでは、選手の発言は原発言の 93.2% の平均時間で訳出されているのに対し、アナウンサーの日本語は原発言の平均 55.4% の時間で訳されていた。このことから、A 氏に限らず球団通訳者たちは、選手に対しては簡潔に訳すことを心がけ、ファンに対しては選手の言葉を丁寧に伝えようとしていることが推測できる。

この訳し分けは、異なる状況間でも確認された（表 2）。A 氏は、ヒーロー・インタビューで選手に質問内容を伝えるときには、原発言の三分の一以下の時間で訳出しているが、囲み取材でこの傾向は確認されなかった。筆者がこの事実を A 氏に伝え、これが意図的行為であるかどうかを確認したところ、次のような回答を得た。ヒーロー・インタビューでは、ファンが選手の発言を待っているため、アナウンサーの質問の直後に選手が答えられるように短時間で訳出をする一方、囲み取材の内容は新聞に掲載される可能性が高く、またテレビの放映時間のような時間の制約もないため、ゆっくり、正確に訳すよう心がけているという説明であった。以上のように、球団通訳者はスコposに応じて様々な訳出方略を駆使していることが判明した。

表 2 A 氏の通訳状況による通訳時間の違い

	外国人選手の発言時間 に対する通訳時間 (%)	質問者の発言時間に対 する通訳時間 (%)
ヒーロー・インタビュー平均 (10 回)	97.80%	31.16%
囲み取材平均 (3 回)	96.17%	113.06%

6.2.3 社会的役割と対人感受性

球団通訳者は**黒衣**という意識で仕事をしている。「目立たない」「でしゃばらない」「選手の邪魔にならない」「マスコミのカメラに写り込まない」「気配を消す」「(感情を)顔に出さない」「取材依頼はすべて断った」など**黒衣**としての〈社会的役割〉を自覚していることがわかる。

訳出業務の割合を多くの球団通訳者が数字で表現し、最大は 10% で最小は 1% であっ

た。元球団通訳者の河島（2016）は、「言葉を伝えるのが0.5%、野球に関することが20%、残りの80%は本人と**家族の世話**」（パラ6）だと述べている。筆者が球場で参与観察を行った際にも、通訳者はその仕事時間の大半を、選手を見守ることに費やしていた。ある新人通訳者が「この状況で僕は何をしたらいいんだろう…そういうのを僕は常に模索していました」と語るように、**空気を読み、立ち位置**を見極め、選手と適切な**距離感**を保つことのできる〈対人感受性〉がこの仕事には要求される。

家族の幸せが選手の安心と活躍に不可欠であるため、最も重要な役割は**家族の世話**だと即答する通訳者もいた。またコーチとの対立を**仲裁**する、選手の愚痴の**リスナー**になる役割も大きい。**仲裁**をする際には通訳者の自主的判断で、表現を和らげるなどの**創造的**訳出を行う事例もあるが（ホワイティング1987; 立原2015）、その一方で中島（1994）は、「地獄に落ちろ」という過激な表現までそのまま訳した方が、最終的には良い結果になると報告している。いつ、どの訳出方略を採用するかを判断する際にも、通訳者には高い〈対人感受性〉が要求される。**リスナー**として通訳者が果たす役割の重要性は、本調査でインタビューをした2人の外国人選手の発言からも確認できる（下線部は筆者による強調）。

Player 1 “...so he just listens you know, he is a listener, sometimes I get mad, and he just tries to “Yeah, yeah, yeah, I know, just take it easy”, but yeah, he listens to a lot of my frustrations, he handles it pretty good, you know, he, he is always there...”

Player 3 “I get angry, letting my anger come out which you know, you shouldn’t, or it’s the coaches that pissed me off, it’s not your (interpreter’s) fault, and they do pretty good, just listening, and just letting us vent, getting it off my chest, and so it’s been awesome...”

広報的な役割はマスコミ対応やヒーロー・インタビュー時に果たされることが多い。通訳者の訳語一つで外国人選手のイメージが決まりかねないため、印象の良い言葉を選ぶと共に、ヒーロー・インタビューでは少し「盛って」訳すこともあるという。また選手に対して失礼な質問には、その質問を遮る、あるいは通訳者が勝手に応えるなどの対応をとることもあれば、「プライベートな質問には答える必要はない」と選手にアドバイスをする通訳者もいる。したがって通訳者は**広報**であり、**マネージャー**であり、**陰の権力者**（Anderson, 1976/2002）とも言える。**陰の権力者**（ibid.）という側面を表す事例は他にもある。ヒーロー・インタビューで選手に不愉快な質問を繰り返したインタビューアーを出入り禁止にした例や、外国人選手の一軍昇格に通訳者の意見が反映された例などである。さらには試合中コーチに、今投げている外国人投手は、今日はもう限界だと進言をした例、また試合中にマウンドでコーチの言葉を訳す代わりに、「もういいかげん抑えてもらっていい？」と通訳者自身の言葉を発した例もある。このときマウンドにいた抑え投手は、通訳者の不意打ちに思わず苦笑いをして、立ち

直り、試合に勝利したようだ。Goffman (1981) は、話し手を、音を伝達する「発声体 (animator)」、言葉を選択して発話を作り上げる「作者 (author)」、発せられた言葉に責任を持つ「本人 (principal)」という3つの役割に分類し、話し手がこの3つの役割を場面に応じて変えることを「フットイング (footing)」と呼んだ。通訳者は「発声体 (animator)」であることが原則である。しかしプロスポーツであり、エンターテイメントでもあるプロ野球の通訳者は、状況に応じて**即時性**、**創造性**を求められるため、「作者 (author)」である場面も少なくない。また通訳者が外国人投手にマウンドで自分の考えを伝えた事例は、「試合に勝つ」というスコプス (目的) を優先し、通訳者が自らの判断で「本人 (principal)」にフットイングをシフトした例だと考えられる。

人と人を「つなぐ」役割を、野村克也元監督は**コーディネーター**という言葉で表現している (中島 1994)。外国人選手を孤立させないために、通訳者たちは、まず自分自身が日本人選手と仲良くすることを心がけている。そして「自分のいないところで選手同士が話すのが一番自然な形」「通訳は手を出さないのであればそれが一番いい、口を出さないのであればそれがもっといい」と語り、通訳者を介さないコミュニケーションが理想だと考えている。これは通訳を「必要悪」と呼ぶ西山 (1970) と同じ (通訳観) だ。この理想が達成されたとき通訳者の必要性は消滅するため、**球団通訳者は、通訳者は不要**であるという (役割葛藤) を抱えている。MLB3 球団で通訳経験のある新川 (2017) も、「理想としては、(マウンド上では) 通訳はいないほうがいいと思っています。人と人とのコミュニケーションなので、人を介さないのが一番いい。それは通訳で飯を食っていた我々にとってもそう。いないほうが理想です」(パラ 5) と述べている。通訳の目的は「異言語話者をつなぐ」ことであり、そのために通訳者は「見える存在」から「透明な存在」になり、最後には「いなくなる」ことが理想となる。つまり「通訳とは自己否定を内包する行為である」という逆説的な見方ができることが示唆された。

以上のような (社会的役割) を果たすために欠かせないのが (対人感受性) だ。**空気を読み**、選手と物理的・心理的に適切な**距離**を取り、選手に共感しながらも球団に雇われているという**立ち位置**を理解しながら、選手と**信頼関係**を構築できる**人間力**が (社会的役割) を果たす上で欠かせない。ある球団通訳者は「あまり英語が上手じゃなくても正直関係ない、そこから選手のために何ができるかが通訳者の醍醐味だ、番頭だと思って仕事をして欲しい」と入団時に球団から言われたそうだ。ある外国人選手は、本調査のインタビューで1分ほどの発言中に **trust** という言葉を6回発し、通訳者に求めることは**信頼関係**だと語っていた。

どのような通訳行為においても、(言語的役割) と (社会的役割) は存在し、法廷通訳に根ざす「**導管モデル**」は司法の虚構である (Laster and Taylor, 1994; Morris, 1995)。しかしその一方で、司法通訳では「**忠実性**」と「**正確性**」が非常に重要視されていることも事実であり (水野・内藤 2015; 水野 2016)、「通訳人が調整役としての役割を持つことには問題がある」(水野・内藤 2015, p.115)。それとは対照的に、球団通訳では

大いに調整役を果たすことを求められていることが本研究で確認された。ある現役球団通訳者の次の発言が、この事実を端的に表している。「通訳の技術者の方々が野球通訳を邪道と思うのは、僕はしょうがないと思います、逆にその方たちはその仕事ができるから野球の通訳になれますかっていうと、そういうもんじゃないんです」。図2はプロ野球球団通訳と司法通訳という2つの対極的な通訳分野における、通訳者の〈言語的役割〉及び〈社会的役割〉を示したモデルである。

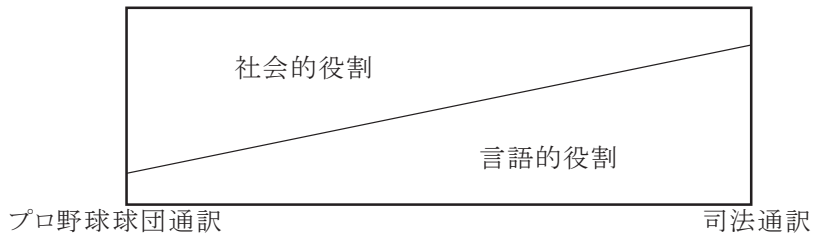


図2: 通訳分野と役割バランスのイメージ

6.2.4 役割葛藤と役割距離

産業医の阿部（2008）は、労働者の全人生や全人格を業務に投入する働き方を「**全人格労働**」と名付けた。球団通訳者の仕事は**全人格労働**である。「24時間10ヶ月選手に寄り添う」「常に携帯の電源を入れておく」「プライベートは全くない」「家族と過ごすことができない」などが代表的な意見である。体力的に激務であり、**板挟み**になるなど精神的ストレスも大きいことから、彼らはこの仕事に**暗黙の適正年齢**があると考えている。「30歳ですけど、スパッと辞めるにはいいタイミングだと思った」「40歳のおっさんがやる仕事じゃない」「本当に40歳になったとき困ると思った」「50歳、60歳でできる仕事ではない」など年齢への言及が多く見られた。契約は1年更新であるため、「めちゃめちゃ不安」「自分の代わりはいくらでもいる」「クビになってもいいように履歴書は準備している」などと全員が**雇用不安**を口にしていた。

〈役割葛藤〉を抱えるだけでなく、**黒衣**であるべき自分と**役者**になりたい自分との〈役割距離〉拡大に苦悩する球団通訳者像が浮かび上がった。彼らは、自分の存在意義を感じられる立場への役割変更を望んでいる。表1でNo.2'が語っているように、球団通訳者は次の目標に向かって転職していき、早いサイクルで入れ替わる。本調査で転職願望がないと答えた現役通訳者はわずか一名であった（表1参照）。ある元通訳者の「自分で賽を振りたい」という発言は、國弘が「自分の歌を唄いたい」（鳥飼2007, p.316）と語った内容と一致する。

自らの存在意義に煩悶しながらも、彼らが仕事で喜びを感じ、**対自欲求を充足**させる瞬間は存在する。印象的であったのは、チームの勝利や外国人選手の活躍よりも、グラウンド外で**欲求充足**を経験する通訳者が多かったことだ。「彼らの人生の一部を共有させて頂いた喜び」「選手の家族から、『僕がいてくれて助かった、有り難う』と言って

もらったこと」などの発言が聞かれた。訳出がうまくいったことなど、〈言語的役割〉を欲求充足の要因として挙げた例はなかった。このことから、球団通訳者の役割は〈社会的役割〉がその中心にあると考えられる。

7. 球団通訳者の存在意義とその位置づけ

立原 (2015) は、言葉を訳す以外の役割がその業務の中心にあり、通訳訓練を受けたことのない球団通訳者を「プロの通訳者」と呼ぶことに疑問を呈し、より詳細な調査のもと球団通訳者の再定義をする必要性を説いた。本稿では、球団通訳者を「プロの通訳者」と位置づける。その理由は次の通りである。鳥飼 (2007) の研究によると、日本の同時通訳のパイオニアたちも体系的な通訳訓練を経ずに、業務を通じて通訳技術を身につけている。したがってオンザジョブで通訳技術を習得することは可能である。球団通訳者の訳語は音声または活字として、テレビ、インターネット、新聞等を通じて世界中に配信される。そのため訳語に関しては、視聴者・読者及び球団関係者から意見が寄せられるそうだ。いわば世界中の人々が「先生」の役割を果たしていると言える。メディア取材時の通訳で求められているのは、細かいニュアンスまでも正確に訳出する技術である。この点に関して、MLB で活躍するイチロー選手が、自身の担当通訳者 Turner 氏の存在意義について、次のように通訳を通して語っている (下線は筆者による強調)。

“I think, obviously, the best way is not needing an interpreter. That can't be the case,” Ichiro said via Turner. “Within the team, the coaches, they try and understand, but more importantly when you are saying things to the media, and the fans read what you say and they want to know what you're thinking, you don't want the wrong information to come out that maybe you didn't mean. That's why you have an interpreter.” (Davis, 2016, para.4)

イチロー選手の英語は「文句なく上手」だそうだ (長谷川 2017, パラ 7)。それでもメディアやファンに向けては、自分の意図を間違いなく伝えるために通訳者を介して発言をしている。ここに球団通訳者の「プロの通訳者」としての存在意義がある。選手の意図を正確に伝えるという役割を果たすことができない通訳者は次年度の契約更新がない。一つの訳語が不適切だったがために、担当選手のイメージを損ない、シーズン途中で解雇された MLB 通訳者がいたことも本調査のインタビューで明らかになっている⁸⁾。また、球団通訳者は選手の契約・移籍交渉というミスが許されない場面での通訳も担当する。裏を返せば、契約を更新された通訳者は、ファン、球団関係者、担当選手に「プロの通訳者」として認められたということができる。

その一方で、訓練を受けることにより、通訳技術をより効率的に習得できることも確かだ。この点に関しては、本調査のインタビューで、通訳者の指導を検討している

日本の球団があることが判明した。この球団では、通訳者の発した言葉や立ち居振る舞いがそのまま選手のイメージになり得ると考え、日本語を中心とした訳語と通訳者の立ち居振る舞いの指導をする外部講師を探していると回答した。スポーツファンは自分が体験し得ない境地に到達した選手の言葉を待ち望んでおり、スポーツ選手は自分の感覚や心情を言葉にしてファンを引きつける努力をしなければならない（山口2006）。そして外国人選手の場合には、選手にしか体験し得ない超人的境地から生まれる言葉をファンに伝えるという重責を、通訳者が担うのだ。訳語の重要性を認識している球団の存在が判明したことにより、スポーツにおける言葉の重要性とスポーツ通訳研究の意義が確認されたといえよう。

8. スポーツ通訳への示唆

本研究から、スポーツ通訳に対するいくつかの示唆を得ることができた。ただし、スポーツ通訳といえどもプロスポーツかアマチュアか、継続的業務か一時的かなど、条件が異なるごとにその内容には違いがあることをあらかじめ指摘しておく。まずスポーツ通訳者には言葉を訳す以外の役割が少なからず期待されているということを含頭におく必要がある。プロスポーツのスコプス（目的）は勝利である。そのため担当選手がいる場合には、是非はともかくとして、その選手の物理的・精神的サポートを求められる可能性がある。時には「フットイング」を「発声体（animator）」から「作者（author）」や「本人（principal）」にシフトしながら、選手をベストコンディションに導くことが求められる。その一例として、球団通訳者の場合には、選手をマスコミから守る盾の役割も確認されている。また担当選手がいなくても、スポーツというフィールドで通訳者は「小間使い」「使い走り」（ホワイティング 1987）と見なされてきた歴史があり、未だに同様の考えが残っている可能性は否定できない。通訳者が「何でも屋」となるのか通訳業務に徹するのかは、業務の性質により判断が分かれるところであろう。球団通訳者の場合には「社会的役割」の重要性を球団から説明され、それを理解した上で入団するため、訳す以外の仕事をすることに問題はない（6.2.3 節参照）。しかし通訳者が通訳サービスを提供すると認識している一方で、クライアントから雑用要員と見なされている場合には問題が発生する。契約時に双方が業務内容を確認しておくことが重要である。

訳出時には、状況に応じて訳出方略を使い分ける必要がある。練習時や試合中には、当事者同士がスポーツ用語などを通して直接意思疎通をすることが可能な場合が多い。その際には、訳出を最小限にとどめ、当事者たちの邪魔にならないよう努めることが望ましい。試合後のインタビューでは、選手はまだアドレナリンが出続けて興奮状態の場合もあり、その一方でファンは選手の言葉を待ち望んでいる。そのためプロ野球のヒーロー・インタビューのようにファンとの一体感を大切にすお祭りの要素の多い場面では、選手の認知的負担を軽減し適切な回答をタイミング良く引き出すために、忠実性、正確性よりも、即時性、創造性を優先することが望ましい場合がある。

またそのためには、言うまでもなく、競技とその専門用語の知識は欠かせない。ただし、エンターテインメント性が優先される以外の場面では、スポーツ選手が持つ感覚や心情を細かいニュアンスまで正確に訳出することが、スポーツ通訳者には求められている。

9. まとめ

本研究は、M-GTAによる分析を通じて、プロ野球という現場における通訳者の役割の諸相を明らかにすることにより、スポーツ通訳者に求められる役割を考察することを目指した。また先行研究で提案されていた、球団通訳者の再定義を試みた。

球団通訳者の役割は「言語的役割」よりも「社会的役割」がその中心にあること、また、球団通訳者は状況に応じてフットイングと訳出方略を変えながら、通訳業務を行っていることが本調査で明らかとなった。球団通訳者には、選手がプロとして語る言葉の微妙なニュアンスも正確に伝えることが要求され、それができない通訳者は次年度の契約更新がないばかりでなく、シーズン途中で解雇になった例もある。「訓練なし」の球団通訳者であるが、彼らは前述のパイオニアたちと同様に、現場で技術を磨き「プロの通訳者」となっていく。しかし、多くの球団通訳者は野球業界参入の手段として通訳者となるため、次第に「黒衣」から「役者」になりたいという思いが強くなり、転職していく例が多く確認された(表1参照)。

本研究から、スポーツ通訳への示唆を得た。スポーツ通訳者はスポーツというフィールドでは「社会的役割」が重視されていることを念頭に置きながら業務にあたる必要がある。また、状況に応じてフットイングと訳出方略をシフトできる柔軟性が求められる。しかし、訳出の精度が軽視されているのではない。選手は自分の意図を正確に伝えるために、あえて通訳者を介して発言しているのであり、スポーツ通訳者はその役割を果たさなければならない。

GTAは部分的事実を再構築する帰納的アプローチであり、普遍性を広く志向するものではない。したがって本研究の成果を、スポーツ通訳全般に一般化することには限界がある。そのため今後は、野球以外のプロスポーツやアマチュアスポーツのフィールドでの、異なる研究手法によるスポーツ通訳研究が望まれる。本研究がスポーツ通訳研究の端緒となったことを願い、本論を結びたい。

【謝辞】

本研究は、JSPS 科研費 16K13275 の助成を受けて行われた研究成果の一部です。本稿は調査にご参加くださった方々のご協力なくしてはなしえませんでした。心からの謝意を表明いたします。

.....
【著者紹介】

板谷初子 (ITAYA Hatsuko) 北海道武蔵女子短期大学英文学科准教授。

【註】

- 1) 西川千春・坂本真実子 (2017) 『オリンピック・パラリンピックにおけるボランティア通訳の役割 - ロンドン、ソチ、リオ大会の実例を元に -』日本通訳翻訳学会第 18 回年次大会 (2017 年 9 月 10 日) で、ロンドンオリンピックでは 700 人の通訳者が業務にあたったことが発表されている。
- 2) 二十数年前とは、同書が執筆された 1994 年から二十数年前のことである。
- 3) 「サンドイッチマン」というメタファーを造ったのはチャーリー・マニエルという選手である。
- 4) 可読性を重視し、分析の対象としないフィラー等は省略した。本稿におけるすべての書き起こしにおいて、中略箇所は…で、筆者による強調は下線で示されている。またプライバシー保護の観点から固有名詞を表示しないなど、表現に修正を加えた箇所がある。
- 5) 「ぶら下がり取材」とは、練習を終えて控え室に戻る選手をマスコミが取材許可ゾーンで呼び止めて行うインタビュー取材のこと。
- 6) 1 カテゴリー中に複数の概念があることが一般的だが、ここは 1 カテゴリーに 1 概念である。また、概念名がそのままカテゴリー名になることもある。
- 7) 紙面の都合上一部の表現を省略した。
- 8) 元 MLB 通訳者へのインタビューで明らかになった事例。担当投手が「ライバル投手のことは気にしていない。自分は自分の練習をするだけだ」と話したのを “I don’t care.” と訳してしまい、アメリカで「あの日本人投手は、ライバル投手のことをどうでもいいと思っている」というニュアンスで報道されてしまう。担当日本人投手とその所属球団のイメージを損なったという理由で、この通訳者はシーズン途中で解雇されている。

【引用文献】

- Anderson, R.B.W. (1976 / 2002). Perspectives on the role of interpreter. In Pöchhacker, F. and Shlesinger, M. (eds.) (2002). *The interpreting studies reader*. (pp. 209-217). London and New York: Routledge.
- Angelelli, C.V. (2004). *Revisiting the Interpreter’s Role*. Amsterdam: John Benjamins Publishing.
- Charmaz, C. (2006). *Constructing Grounded Theory-A Practical Guide Through Qualitative Analysis*. Thousand Oaks, CA: Sage Publications.
- Davis, C. (2016). Miami Marlins' translators play vital role helping players express their point of view. *Sun-Sentinel*. 【Online】 <http://www.sun-sentinel.com/sports/miami-marlins/fl-marlins-translators-20160519-story.html> (December 1, 2017)
- Goffman, E. (1981). *Forms of talk*. Philadelphia: University of Pennsylvania Press.
- Laster, K. and Taylor, V. (1994). Interpreters and the Legal System, Leichhardt, NSW: The Federation Press. In Pöchhacker, F. (2004). *Introducing Interpreting Studies*. London/New York : Routledge.
- Morris, R. (1955). The Moral Dilemmas of Court Interpreting. *The Translator* 1 (1):25-46. In Pöchhacker, F. (2004). *Introducing Interpreting Studies*. London/New York : Routledge.

- Pöchhacker, F. (2004). *Introducing Interpreting Studies*. London/New York : Routledge.
- Wadensjö, C. (1998). *Interpreting as interaction*. London and New York: Longman.
- 阿部真雄 (2008) 『快適職場のつくり方』学習の友社
- Full-Count 編集部 (2017) 「上原浩治を支える通訳の思い「私は恵まれてる」「彼が行く場所ならどこでも」『Full-Count』【Online】<https://fullcount.jp/2017/09/24/post85318/2/> (2017年12月1日)
- ゴッフマン, E. (著), 佐藤毅・折橋徹彦 (訳) (1978) 『出会いー相互行為の社会学』誠信書房 [原著: Goffman, E. (1962). *Encounters: Two Studies in the Sociology of Interaction*, The Bobbs-Merrill Company, Inc.]
- 長谷川滋利 (2017) 「英語の話せるイチローは、なぜ一流の通訳を雇うのか 日本人メジャーリーガーの『英語事情』」『現代ビジネス ライフ』【Online】<http://gendai.ismedia.jp/articles/-/51733> (2017年11月29日)
- 木村護郎クリストフ (2017) 「つながり方を探るドイツ・ポーランド国境地域—異言語間コミュニケーションの諸方略」平高史也/木村護郎クリストフ共編『多言語主義社会に向けて』pp.194-206 くろしお出版
- ホワイティング, R. (著), 松井みどり (訳) (1987) 『日本野球は永久に不滅です』ちくま文庫
- ホーナー, B. (著), 安西達夫 (訳) (1988) 『地球のウラ側にもうひとつの違う野球があった』日之出出版
- 石黒弓美子 (2007) 「通訳の種類と特徴」日本通訳者協会 (編) 『英語通訳への道』pp.48-50 大修館書店
- 河島德基 (2013) 『スポーツ業界の歩き方』ばる出版
- 河島德基 (2016) 「言葉を訳す仕事は全体の0.5% 阪神タイガースの元通訳が語る、スポーツビジネスの難しさとは」『AZrena』【Online】<https://azrena.com/post/6008/> (2017年8月18日)
- 木下康仁 (1999) 『グラウンデッド・セオリー・アプローチ 質的実証研究の再生』弘文堂
- 木下康仁 (2003) 『グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践 質的研究への誘い』弘文堂
- 木下康仁 (2007) 『ライブ講義 M-GTA 実践的質的研究法 修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチのすべて』弘文堂
- 北林利治・杉山泰・ボナン, R. 西村友美 (1998) 『初めて学ぶ翻訳と通訳 - 言語コミュニケーション入門』松柏社
- 溝口良子 (2009) 「通訳者の役割モデルの研究 -6つのスタイルと2つの機能」『通訳翻訳研究』第9号, pp.71-86
- 水野かほる (2016) 「法廷通訳における訳出上の課題について - 否定疑問文を対象とした通訳調査からの考察」『通訳翻訳研究』第16号, pp.63-84
- 水野真木子 (2008) 『コミュニティー通訳入門』大阪教育図書
- 水野真木子・内藤稔 (2015) 『コミュニティー通訳 - 多文化共生社会のコミュニケーション』みすず書房
- 文部科学省 (2016) 「特集1 スポーツ庁の創設とスポーツ政策の推進」『平成27年度文部科学省白書』【Online】http://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/html/hpab201601/detail/1376605.htm (2017年12月1日)
- 長井鞠子 (2014) 『伝える極意』集英社新書
- 中島国章 (1994) 『プロ野球通訳奮闘記 - 涙と笑いの異文化交流』NHK 出版

- 中島国章 (2015) 『プロ野球最強の助っ人論』 講談社現代新書
- 西山千 (1970) 『通訳術：カタコトから同時通訳まで』 実業之日本社
- ポエヒハッカー, F. (2008) 『通訳学入門』 鳥飼久美子 (監訳). みすず書房 [原著: Pöchhacker, F. (2004). *Introducing Interpreting Studies*. London/New York: Routledge].
- 佐藤勉 (1976) 「社会の基礎理論」 本間康平・田野崎昭夫・光吉利之・塩原勉 (編) 『社会学概論』 有斐閣大学双書
- シャーマーズ, K. (2008) 『グラウンデッド・セオリーの構築 - 社会構成主義からの挑戦』 (抱井尚子・末田清子監訳) ナカニシヤ出版 [原著: Charmaz, C. (2006). *Constructing Grounded Theory-A Practical Guide Through Qualitative Analysis*. Thousand Oaks, CA: Sage Publications.]
- 新川諒 (2017) 「日本人選手に通訳は必要か 田中将大への“苦言”が波紋、経験者の考えは？」『Full-Count』【Online】<https://full-count.jp/2017/06/10/post71998/> (2017年8月4日)
- 立原智裕 (2015) 『球団通訳者に求められる役割に関する研究：日本野球とアメリカ野球における「文化の差」を埋める存在』 修士論文、立教大学大学院異文化コミュニケーション研究科・異文化コミュニケーション専攻
- 武田珂代子 (2013) 「機能主義的アプローチ (スコポス理論)」 鳥飼久美子 (編) 『よくわかる翻訳通訳学』 pp.122-123 ミネルヴァ書房
- 友野百枝・宮本友之・南津佳広 (2012) 『通訳学 101- 理論から実践まで』 大阪教育図書
- 鳥飼久美子 (2007) 『通訳者と戦後日米外交』 みすず書房
- 鳥飼久美子 (編) (2013) 『よくわかる翻訳通訳学』 ミネルヴァ書房
- 牛込惟浩 (1993) 『サムライ野球と助っ人たち』 三省堂
- 山口政信 (2006) 『スポーツに言葉を - 現象学的スポーツ学と創作ことわざ』 遊戯社
- 山本耕太 (2014) 「日本の臨床心理学領域におけるグラウンデッド・セオリー・アプローチ (GTA) を用いた研究の概観」『立教大学臨床心理学研究 (Rikkyo Clinical Psychology Research)』 Vol. 8, pp.57-65
- 米原万里 (1998) 『不実な美女か貞淑な醜女か』 新潮社

